近世名家書畫談二編

三

内閣文庫

近世名家書畫談二編卷之三目次

○本朝名山大雅畫ふ真の幽趣ゑ得る事
○唐帖中日本書釋文并考
○崎陽客江戸の花扇ふ詩ゑ寄る事
○僧月僊ゞ畫事
○近世江戸書画會原始并落款
○盤珪禪師の逸事
○小澤蘆菴翁の傳
○僧浦蓮の逸事
○勝間龍水の傳

内閣文庫藏書

○梅里山人の逸事
○白石先生の書再収奇遇の事
○熊澤伯繼藤樹先生ふ謁ぶ乞ふ事 附真跡短冊
○仁齋先生櫻隠の號 附梨本翁
○大石良雄二武畫讃 并子息童名
附 清人四十七士の義烈ぶ稱誉ぶ事
○赤穂義士閑居晋名 并大高去よう發句

近世名家書畫談二編卷之三

雲煙子　安西於菟編次

本朝名山大雅畫ふ真の幽趣ぶ得る事

此邦南宗畫の開創と稱ぶべきハ祇南海柳里恭等なり

右二先生の目嘗とせ〻ぶ雲ハ黄蘗諸師の書画なり近世彭百川大雅堂出て南宗大成ぶ大雅ハ普く海内の絶境ふ游歴し其幽趣ぶ探るふい多る故ふ富士淺間白山立山熊野等の景ぶ造るぶ皆意外の奇態ぶり洵ふ此人出てより名山大澤真の面目ぶ生し多りといふ亜し

その平生の墨法筆意種〻ふ變化して一定なるべ是皆

古人の妙處は斟酌して其跡は踏襲せず畫く畫家の習氣は脫して自ら一家を為す者なり本朝逸格の始祖と仰ぐべき柔嗣祭先生の說まことに去らざるなり

山陽先生墨竹に題して云大雅山人墨竹題臨溪影更長五字有霞樵之款西谷生携来索鑒曰觀者皆以為非真也余曰真也山人書畫可謂醜怪矣而醜中含妍怪中藏正世之贋手能贋其醜與怪而不能為其妍與正試以此一觀と実に大雅の書画半鑑にて八觀ることなかるべし庸眼には醜怪のみにて妍正風韻を鑒者にはなかるべきなり

因に云大雅翁自刻の印に前身相馬方九皐と鐫られあるは是形似は神髓は事とするの意にて陳簡齋の句にて列子に出る故事に人の姓名九方皐とすべき は誤りにて方九皐に作りしなりそは其まま用ひて終身改めざるまでなるにて其人の胸襟豪放は知るに足ると或人云り

唐帖中日本書釋文并考

陳元瑞玉煙堂董其昌戲鴻堂帖中に出せし日本書と記せるは何人の書といふこと は知る人稀にて廣澤翁も未だ考へずといひ讀こなるき字はなりといり予今松下見

林翁の説ふ付て釋文並ふ考証附して法帖証好む人乃為ふこゝ証ひろ望

暮春。遊施無畏寺。翫半落花。　絶句為韻。

鬱檀一首

落花委地亦殘枝。如有如空意始知。何似道場檀越老。年頽白髮半頭時。

三月盡日。於施無畏寺即事。　絶句為體。

左拾遺一首

艶陽三月今日盡。白首拾遺感懷催。欲以危身期後會。明春誰定見花開。　扶醉走筆。不避調聲。

以上二枚。此皇子手蹟臨之也。

日本草書。如唐人學二王筆迹。　薛嗣昌

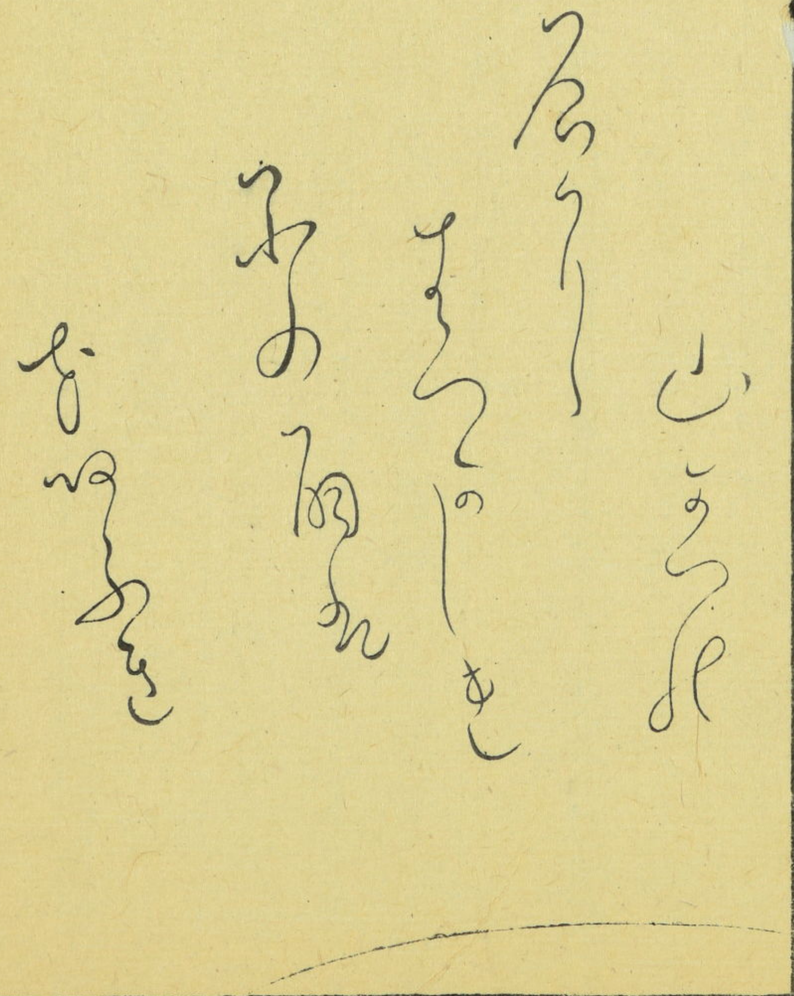
晉陽張誠一嘗覽　子雍題

右詩二首並ふ跋語十二字まで日本書なり今按るふ此皇子ハ醍醐天皇第十六皇子兼明親王なり御母ハ藤原朝臣淑姫参議菅根の女親王二品中務卿ふて前中書王と號ゝ嘗て小野宮右大臣實頼朝臣が為ふ忌まて嵯峨の龜山ふ隠る詩文音樂ふ長ゝ又書証能ゝ世ふ老君子の曲証傳ふ此親王の作りなり変なり初親王龜山ふ居も此北山ふ居る変の施無畏

寺始名八觀音寺ゐて淑姫葬瘞の地なる故ゐ親王八
嘗寺の檀越多りと云ふ経歴しる多ま人所謂欝
檀とハ親王自ら称しゐるゑ左拾遺ハ官名本朝の侍從
ゐ嘗まりこれ親王同時風騒の士なりん故ゐ云ふ左
拾遺ゐ詩ゑ書しゐるゑ人なるべし但し跋語ゐ此皇子
手跡臨之也とゐのまバ何人ゐ皇子の御書ゑ臨摹せし
ものと見へ多り

崎陽客江戸の花扇ゐ詩ゑ寄る事

瀧澤瑣吉子ゐ記ゐ二十年前（寛政二年ゑ云）北里五明楼なる花扇
とゐひし遊女差母ゐ孝行なりしと其事ゑ板して巻ゐ
賣るものゐ多し予ゐ聞ものゐ耳の底ゐハとゑざりしゐ友人南野ぬ嘆賞乃
あまり彼孝女傳と題せる小紙二頁ゑ花しゐ云ふるゐ
この比の商船費晴湖崎陽ゐ於りこの孝娼の事ゑ傳聞
て感称し漫ゐ是ゑ賛しゐる詩草ゑある人花寿せ
ゐバ南野ぬし又是ゑとして表装し彼花扇ゐ艶筒さへ
ゐ帖の末ゐものしつ煙花三絶と題して今ゐ秘花せら
まし中界又云彼遊女ハ心ゐ風流ゐして書ゑよくせし
とぞこまゑバ世人よく去りめどその孝行ゐいまりてハいまざ
知らざるものゐ於りべし予ハその風流と能書ゑ取らん



雲煙室藏

孝の一字ヲ愛るのゑ中畧媚ヲ献ゞ欲ヲ鬻くゝその孝を
ゑて賞せらるゝ其名異國ヲさ聞多くこハ未曾有の
美談なるべや云云下畧費氏が詩左ヲ記す

綽約氷姿似紫雲清歌妙舞更能文脩行孝道無
雙侶聲譽京華湿上聞

名擅青樓第一人天生百藝妙通神憐余長作天
涯客碧海蒼茫欲問津

江戸有名妓花扇者美有姿容渉獵文藝家有
孝親更能曲盡孝道余来崎陽十餘年矣嬌麗
静美風流跌宕之輩雖不之人獨難其孝而能

文也余聞之不勝神往因賦二絶郵寄云

苔溪　貴晴湖□□

按ずるヲ此花扇ハ東江源麟の弟子ヲして詩歌など書
ゑる技ハ見ることのゝヲ又清人姬中ゝが詩技
得るまゝ左ヲ記せ又花扇が真跡技影寫して載せハ
其孝子并ヲ能書なる技取るなり彼が容色の如きハ
年技去ること五十餘歳予が未生以前の事なるゝハその
くゝき技知る事のなさん

伊人道阻長邦媛溯清揚國色弥間雅神娥羨淡
粧花羞王氏美扇詠婕妤章莫謂東都遠崎陽下

原書誤以都為湖

葦航。

戊申冬日。長崎客館題。寄江湖花扇美人。五律

古雲　姚中一□□

一章

あしぎ合歌仙三十二番

勝　左　遊女花扇

忍ひとかさふりて見し春の伊さらぬ秋の夜の月

右　三島景雄

河のふうかる月の影きよと綱をひきくる舟とをり

又石山寺鳴琴の二字を書て納めらる此額を源氏の間の上のこるふ掛あるとぞいふある人の所為と覚へ侍り

僧月僊が畫事

伊勢寂照寺僧月僊が画識者其格の陋を議せるとい共元来北宗法より出て唐宋以来南宗ふ比して格卑しと文士の云爲なり尤同時應挙吳春風致ありと い共此輩ハ意中ふ趣ぶ得ざるハ筆を下さるが故ふ畫く爲悠然餘地ありて風致ぶ無備せり月仙ハ紙絹ぶ見きハ瀟灑として揮毫疾速なり又傍ら題辞ふも及び頗る鑒賞家の眼ふ合へるふ於て文人輩南宗の大雅無邪ぶ以て相配比し格卑しと い論ぶ發せ是ハ天然の品格ふして大雅無邪ハ神逸の場なり是一犬の嘘萬犬傳ふのなひいつ

月仙は彼南宗輩ふ〻〻べて陋むるふ至るべし何ぞ餘の畫家とひとしく目まべくんや廣澤先生の書は月仙が畫は等閑ふ評ま屋〻べ如し志〻まバ廣澤の書月仙が畫は雪山ふ比ま〻るべ此格又凡筆の及ぶ〻ふハあ〻ざるなり

按ふ月仙年〻千金の潤筆は得るとも晩年山門は建立し佛殿は修造し経疏は集め其餘は貧民は救ふと云中年世人貪僧と心得てその画は陋〻べ〻のゝ又畫の世間ふ多き故ふ何る人月仙が人物は貧民乞人の形容ふ似ありと是形ち評ま屋〻べ詆毀ふして鑒識ふハ〻〻べ月仙が人物の簡なるハ仙釋の意ふ

黙契し〻て鄙俚の俗習ふ染〻ざる変其畫は見て其人は知る屋きふや

近世江戸書画會原始并落款

杏花園主人近世書画會ふ宴集ま〻る変の畫は巻とな〻し表名二水七画と題し序ふ其人名は記し跋ふ所名時日は記ま如左

画人七名

芙蓉　梅渓　幹〻　舜瑛

文晁　南湖　蛍山

雲烟室藏

近世所謂圭画會者海内皆是也

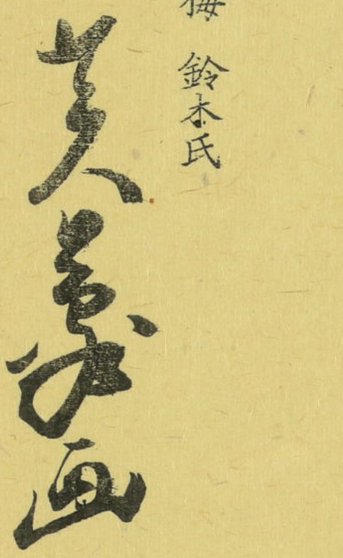
文化庚午季夏

遠塘散人

梅 鈴木氏

山水 文晁妻

竹 谷氏女志夫子 繁堂妻

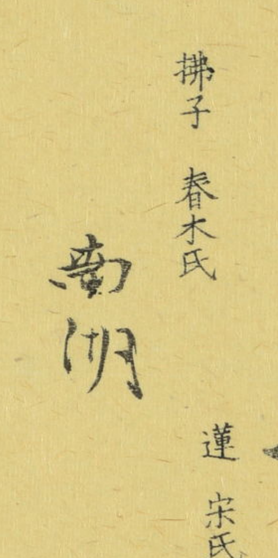


山水 谷氏

壬子正月朔日於席上 文晁

拂子 春木氏

蓮 宋氏紫石子



右柳橋萬屋宴集。畫人席上所題。集以為卷。時寛政四年壬子。春正月十七日也。

杏花園□□

盤珪禅師の逸事

師名永琢播州綱干の人十二歳の時儒家の大學明德章を講ずるを聞心ふ疑ふ変ありてこゝより深く直指の宗旨を求ゝ難髪して雲甫愚堂了菴逗元等の数師ふ参して遂ふ悟入を正不生ふよる

さ一向心を清き水鏡色づらさきも垢つきのきん

とよゝくこゝろの垢を離きるゝと云ふ一又誹句ふ

草よ木よ汝ふ去免もゝさ乃露

是又悟道發明の一詠なり栢原捨女ハ誹諧ふ名あり夫の死後此師乃法門ふ入貞閑尼と云より稼師一とを

和州吉野ふおハ〻時里民の為ふ曰挽歌廿首ふ作りてなるべ一こと人の知る変なりまさ結制の時僧徒数百人来集一居多一ふ其中ふ賊僧ありて誰ハ銀子ふ失ひ何某を衣服ふ盗まゝ一なゝ毎日紛失物ありて難儀ふ及びゝ後ふ賊ふなせる僧大槩ふ知まゝ衆僧一統ふ禅師ふ訴て賊僧ふ追放せんこと求ふ禅師聞届ゝそのまゝ捨置まゝ一ハ数日の後衆僧又此事ふ禅師ふ訴るふ猶ゝ其まゝ捨置まゝ一如此事三四度ふ及びて猶そのまゝなりゝまゝハ衆僧大ふ腹ふ立善賊僧ふ追ふ事なるまゝハ衆僧一人ゝ残らゝ退散ふ

しといひしを師笑ひて退散しぬ人ハ勝手多るべし悟道善行の僧ハ教るを及ばず此結制を左様なる悪心の者ハ教ることさらん為なるまじ　ハたゞ悪僧ハこゝろを追放ぎといとまをこそ無僧大ハ感じ服しぬ彼賊僧も是ハ傳聞て大ハ開悟し座中ハ出て賊ハなせし事共ハこゝろ懺悔して前非改免徳行堅固の僧となりて後世ハ名ハつゝしとそ

小澤蘆菴翁の傳

蘆菴翁通称ハ帯刀尾州の産なり和歌ハ始免冷泉為村卿乃門人なりしが故ありて破門さるゝハ蘆菴一時ハ歌體并ハ書風とをハ變じて一家ハなせし故郷まを蘆菴ハ中ゝ我調ハ守り居き者ハ有るまじとハ感ありしとそ何某の宮久しく芦菴が和歌ハ長じぬることハきこえ及ばず毎度御使して召まゝ共固く辞して参まゝ隠者のこと殊ハ老人なるまゝハ風雅のことハ此方ハ呼むことも礼ハ失ハ似多まゝハ来らざるも道理なりこなるとよりこそ尋ぬるとて太秦の草菴ハ訪ゝ多まゝしハ芦菴もありがたくて始て御目見ハ上其翌日宮ハ御禮ハ出てそなまより折こハ宮ハ参上せりとそ世上の俗人肩ハ袴着して富豪の家ハ属しハ参つゝ仕ハるとハ雲泥なりて近世ハ弥しき人品なり又

宮ゐをさたろの尊貴紙風雅の為をゐ屈〜〜まひて三里ゐ近き雲紙尋訪ハせ給ふこと古人の風ゆゑていとゆうゞき沙心ぞ〜なりゆ

又丙午のとし芦菴よゐき箏紙求めいぶ〜てこゞゆう弾試るゐ姿ゐを仰ぜ其音さやゆかなるぞそのまゝ樂人其ゐ見せうし

ゐ樂人を弾見るゐ誠ゐ響ゆ〜く是ハ古き器ゐてきゆを木理も見ごゝゐて後世得ぐゝき箏なきとかく鳴らでハ何ゐハせんとて戻しぬ芦菴ゐ〜ていひるハいゆゐをよき箏なゆきこ〜手紙入きなバ鳴りなん其時をこと悔まひぞとて家貧き中より金五両紙出〜て買求て箏の上下の裡の穴より砥

石をて甲の裏紙磨ゆう十日の間ひまなくもりて緒紙うけて弾試るゐ果〜て絶妙の音紙発〜勝まてる名器となりぬ皆人感〜羨ゆゆ〜ゐ或日中島道咸来り〜バゆの箏紙出〜て弾〜む道咸ゐをて面を羨〜き箏紙所持〜なゐをのゆなとい〜芦菴ゐ〜をゆ〜くゐゐゆるゐなのきゐやと問ハ道咸何いゆまるべきやとい〜実ゐきゆバ此箏紙君ゐ奉ゆをゆ〜失禮ハ為ゆ〜ゐを程の上手ゐ良箏一面をたくさ〜さるハ恨なきバ贈り申なりとい〜ゐ道咸を思ひゆ移〜再三辞ゆ〜ゐをその志の厚ゆうゆ〜ゐバ悦びてをゆひうけ其日こゞゆう携〜て帰ゆきゆりとぞ

又ある時門人の富家なる者吝嗇なりしを示さんとて
人の壺の富は草葉を分く露の風なびくの光りなりと
まる一日いづかたへか行てうるさき途中より輿なやとひて家を
うり轎夫を賃紙与へんとまるを錢の三文なりさきに隣舍
を乞ひしを折節その家主なりなれば三文のつくのひまとて
よろこてとる

津の玉のなるはの所のうを海とうかなてかまをなる
又ある夜盗人来りうてをひる翁とく知りて大とをー出るまに
を盗人共之入るでをりぬその翌夜まさきうるまど同じ
さ海なりうるまば後は来らまをなりぬるまに

ひろを海の岩をうてしこの神とよるくうる沖津白なる
まる四條戯場を韓信の故事紙引く伎藝の変ふて蘆菴が
うるとて

来つひを海となるべき谷水もたちー木の葉のやぐるなり
とよめるもこまなりといひてりとそ然るをこの歌ぬーは芦菴なり
ぞ隠士学丹といへるがうるなり此韓信を題きる歌紙誰を芦菴
をかうーーーは四句めをうるまもとそ少ーそま紙聞ひどりて世
を蘆菴なりといひてもーーはて戯場をもをうとをーーと
なるん芦菴の歌を名高うーーとてをうてをるべーー天明戊申
回禄の後太秦の地蔵堂を假居せりその時　禁裡炎上を

今朝ふる雪ハ焼の涙となりふりこそ昔のゆきの庭

頼山陽杜詩以夔州為上乗の條ふ蘆菴翁和歌為當代第一而其避災寓太秦時称最深妙故太秦者蘆菴之夔州也と芦菴ハ老杜ふ比をしたるべきか

ひくまもとしたもの秋草ちどりなくこゑ城住所とさるむまをハ

いまはよ城うつまをふなりうまをて松ハ雪のまそふこそきえ

初花のころ近きわらハ見ふ行しやといふふ

時なるぬ寒さふ老ハのしるもちるき花ふも見ひこそ桜

うつら

かりふきて過ぬるやうまをうつる野ハ昔のいをの垣根を

朝雪

山陰の松くろ城出る朝雪のつもるこそ木このもろ雪

近世京師ふて地下和歌四天王と称するハ澄月蘆菴慈延蒿溪なり各和歌の風躰城異ふして一様なるも澄月ハ老輩ふて先達なり芦菴ハ才氣秀發古躰今躰自由りて詠歌の上手此人の上ふいづる者なし大愚ハ清新況味城詠て歌学ふ漢学城兼備てる実ふ此道の宗匠なり蒿溪ハ澹泊城専一ふして言外の餘情城志も高上の風躰なり又和歌よくして近世の達人なりとぞ　橘春暉説

僧涌蓮の逸事

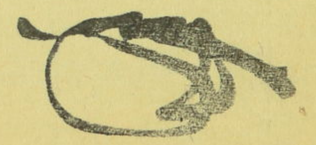
畸人傳ふ涌蓮の傳に載せるといへどもこゝに奇事にきくまゝ
その大槩に載せける時茶人某の招きにるふ涌蓮云く愚
僧ふハ茶ハこのまぬとそさらふ行ざりしふ再應ふ及びしにハ
遂ふそぐしぐるくて招ふ應じ行きしふ囲ふ入りて去バ一
坐一居りしふ主人ぬと用事出来てさきしに跡ふて涌蓮
爐邊ふなるふのこるを茶入に取て見て居らきしがい
ぶかやしうるんと取り落して器ぬと共ふ少し焼爛
しふ主人来りて大ふ與さわ高價を得ぬるし珎器乃
かく損ぜしをいぬむ氣色面色ふ顕ハきしに法師氣の
毒ふや思ひぬ黙然として居らきしハ主人を其座乃不

興なる様に愧ぬるぬ色に直しにあやまちハ是非をなし何
卒和歌一首よそて添らきと尚ハきうとひさきふ乞ひ
きバ漸こゝろむちつきて去ぬバうしをきそまろんと華
とりて

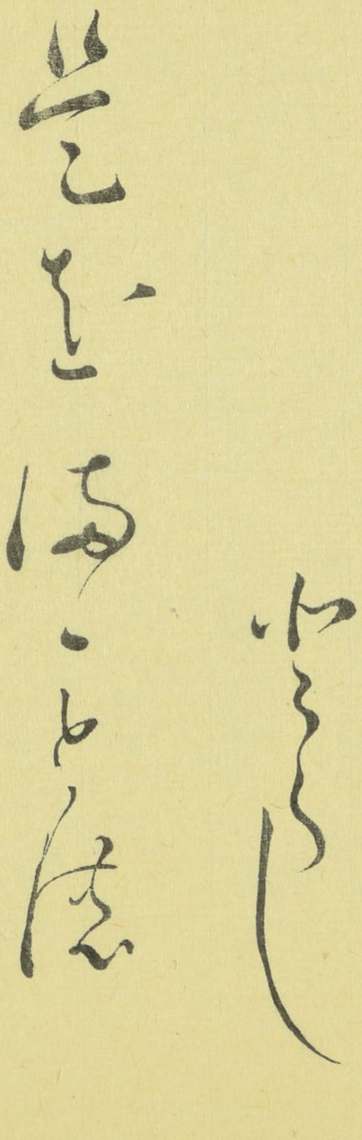
伊勢の海の海士の翁の去ぬぎとそこさ浦ふろそ
と書て去ぬしにきバ主人を大ふよろこび是ふそこそ此茶入
の一奇事とこそなり申きとて大ふ與ふ入りて其日に終り
ぬとそその後此器このるふよりて若干のこゞ稼ふかゝらき
某侯の海流とハなり申るとそ又遁世を一時の歌とそ

人なこふ墨乃衣ハきてきまどをこそ合稼てぬきそてふり

是八涌蓮闍黎の賛真跡なり
此歌既に畸人傳に載せ



雲煙室藏



人なるみてまつの色い
さらぬ市ある
なるらんもの
かな

荷葉縮高

中村家藏

まる性衣ふのうこと一時のうことそ
人なるふ墨の衣ふきうりもうたなふこうとそ
又山居春曙と題ふそ
うれ世ふハうとと住山ふこなふことそ春のはるふの
勝間龍水の傳
龍水名ハ定安新泉と号ふ業ハ池永道雲ふ受てまうこ
篆刻ハ餘事とふ江戸新和泉町ふ居住して父ハ町役ハ
勤む其後ハ継て傍ら幼童筆道指南ハ業とふ常ふ
畫事詳諧をふなせり海の幸山の幸と云画本ありまうこ
古章印譜二冊あり寛延寶暦の間府内ふ其名高し

又そのころ高名なる俳優市川徳齋三升を初として両三輩此門子なり常に財ゝむさぼる心なくして極て貧窮なるまども門弟餘分の束脩あるまバ必ず返さに至るまく困窮なる者の子ハ筆墨なども与へて買しむることまくなり又その支配まる大長屋まして裏屋百軒餘ありといへども其役徳ゝ貪ることさらに又手跡稽古の子供数多なるまバ二階下共に紙屑ゝ及び古き紙屑屋ゝ与へて汝困窮の渡世何ぞ屑を遣まに代物に及ぶんやとて是又さらに受ず萬事こゝの如くなるまバ衣類とて自由を得ず金銭ゝのることを稀なり或時月初旬の比

老母女房ゝるとも佛参しるる留守なりしが初松魚を賣り来る聲ゝくや否や持る筆をも捨てそゝろに及び入まて買浮しゝ家内に代銭ゝなくて八なこゝ多まバ芝まゝなく婦人等の信仰なる一向宗の持佛堂に三ツ道具のきよらに餅りゝ多るゝ紙取いでしまぐに隣町なる仕廻物屋の通りゝ多るを呼て賣拂その銭まて鯉の價ゝ代つくの八近邊の朋友平砂百菴乾什買明など招きて大ゝ酒宴ゝ及ぶ数盃ゝ重ゝ家内の者協りて こゝに驚き三ツ道具のゝ〻ぐる紙ゝらこしゝバ龍水云やうそまゝ初松魚に變じゝるこそ南無不可思議光その方

とて今日佛参して帰りぐゝと思ふ事即極楽なるも
朋友と共ふ會して楽こびの一むす即如来なりとて
少こゝろふけぎ談笑自若たりしとぞ又寶暦六年秋稲荷の幟を新ふ製し書たるふ龍水氣ふすぐこゝろざることなりて間ふ合ざるまゝ詮方なく其子息ふ属して書せたり書おりて父ふ問て名字ハ何と書ゃ可きやと
いハるゝまゝ龍水答て堺町俳優等おゝ方の名ハ請つぎて
名乗るが時花物なり又釣鐘の子を撞鐘とゝのゝを風
鈴ゝ云ふ法ハ龍水が子なるまゝ蛇水とあるとを書給ふとて
そ事ふより松森の幟ハ蛇水が筆なりとて諸人大ひふ称美
ゝとそのゝろの物ぐゝろなり

寶暦の昔と今日とハ僅ふ八十年バかりハ色ぐゝの龍水が性
質謙遜ふして和漢の文人を許せど俳優の言語釣鐘
の類ふ比況しゝることゝ又幟を書べき程の腕ハ未ざ
別号ハ立ざるなれど古人の淳厚こゝろの如し

梅里山人の逸事

山人姓陶名酉字沖已号中郷橋邊人江戸本所中之郷
ふ住せ法尾師其なり温潤ふして世事ふかゝはらぬ壮年の
こゝろより家事ハ子息ふ任せて其家のこのゝふ閑居し
常ふ畫事ハことゝして山水洒落花卉翎毛各逸趣ありて

又山水中ふ自ら題辞せるものゝ時ゝ墨水の邊ふ出で釣糸垂て月夜家ふ帰ることゝなるもき詩賦を吟じて自ら閑適糸甘んじ又平生他行せるごとふ家糸鎖をとゝなりゝる時盗人入りて鍋釜のごぐひを持行ゝる糸ゝるゝふ住婦人是を見つゝたるあり婦一山人を伴ひ来りゝまぐぐふ其由糸告てゝのき見ゝ盗人ゝのきゝとゝゝふ山人是を見なゞゝ自若としてよゝくとそのまゝもてあゝう其後も猶鎖もことなゝ又常ふ画糸寫して人ふゝのゝふとゝゝゝども決して潤筆を求ることゝ糸このまゞ自ら隠居の扶持糸ゝて足きりとゝゝのる人畫糸ゝことゝゝのる金二百疋糸包て

潤筆ふあゝる山人辞してうけゞ畫なりて後まゝゝゝむと
ゝ共いよゝゝゝるゝゞゝ故ふ止事糸得ゞひそゝふ机上り
置てゝるゝその後三ヶ月程歴てまゝ訪ふことゝのるふ其まゝ
机上ふゝのゝしゝゝゞその澹泊なる要より画を又あゞゝ
超凡なりこの

白石先生の書再収奇遇の事

予が本舗の主人玉巖寛政享和の比なゝ新寺町慶元書
堂ふゝのゝて少壮なりゝ時四ッ谷邊ふ事ゝのゝて通行せゝ折
こゝゝのる紙屑屋ふ紙屑のゝづゝゝゝ積みあゝゝゝが婦ゝ故紙
の袖ふさゝるゝものゝのゝ何心なく引出ゝひゝき見ゞゞ小箋ふ

白石先生の楷書自作南天燭芭蕉自鳴鐘の詩三首紙寫せし物のありさまを共真贋のことハ知るべきやうなきまで低價紙出してこれを紙子ふくまでうまきよといはるまでハ俗屋ハ元より書うざることなるまバ一紙の反古ところ得さらハ鶩眼ハ及バんとて物せし紙ありて置て去まりやがて家ハ物りて後北山篁墩などの先生ハ示せしハ是ぞ真跡ことハ奇絶の書法なりと各讃賞せしハ玉巌こゝハよろこび天の賜なりとて珎藏する紙朋友ハ玩月と号して書生之書肆なる去ゆう是又慶元堂ハ同居し直紙ハ乞て懇ハ渇望せしハども玉巌由るさゞ元より沽ざるものとまるゆへハ他

行のあり紙窺ひ箱の中より其書紙さぐりいでして價金四両を入まを亟ゝ其後玉巌此書紙出し見んとせしハ白石紙金ハ物る者ハ玩月として封金ひる紙見て大ひハ驚き玩月乃物る紙待早速元のごとく書ハうんこと紙いひくとなどのあり肖ハもとも己ハ他沽却せしなまバ物るべきやうなりとそ只黙して言葉なるまバ是非なくそのまゝおまどつぬ玉巌主人を此白石翁の詩紙得しより古書紙好むの端と成なまるより老年ハあまびて折こかるまたりき其後追〻好事の心深まるよひて猶白石の書の志念やまゞ朋友と書画乃話ハ及バゝ出せし程のものなり其後三十年紙歴玉巌

晩年に及びしころ予が白石先生の書幅得しことありるに
小楷にして詩の様常に耳に熟せし雲の色の髪鬢して
贋にのぐるまじ二ツ有べきやうなし果して此書なりんとあまい
即時に玉巖の居ぐるに伺ひ机上に載置て悔りぬる巖
帰り来りてこれを見て常に思念に堪ざる雲の白石翁の
書量のまことのうしに愕然として驚き夢幻のごとく
してやまんあり是に雲煙がかく色のつるなるべしと即時
使して呼ましに予即ちゆきて手に入し由を述しに是ぞ
予が常に色のぐる雲のなり今再び見ることを得たり
喜び價を程まをいぶんしと云ひましに予もいと

直を取るべきや実にそまなるに優曇花の再會と云べきあ
よろこぶに堪ることにはこのまに無ぐせんとて贈りしに此書
予が為に千金をもかへじとよろこびきそまるに玉巖堂
の收蔵とはなまり千歳の紙墨の今に折に出る幅見るに奇と
まるに余ぐまでも人世一代に一紙のそのまをあて一ぶび失ひ又
数十年を経て再びこれを得るに奇遇のあるべきや
是韓退之が畫の記の感嘆と同日の談なるべし玉巖老人此
奇遇を以よろこぶのあまり它山先生に跋文を乞ひましに義をあく
して世を去りぬ先生をもその秋姫路侯に随逐せしまに都下
に帰りさるに故にいまぐ稿を結ぶに及ばざる事ときこゆ

熊澤伯繼藤樹先生ふ謁ゑ請ふ事 并真跡短冊

藤樹年譜ふ元和十八年辛巳先生三十四歳此冬熊澤伯繼来て業ゑ受く去秋始て来て人ゑして謁ゑ請ふ先生その志の真偽ゑ考ぶ故ふ固く是ゑ辞せるふ請てやまゑ先生書ゑ以て是ゑ辞せふ猶て曰たゝひ教ふ與らぬといへ共いぐで二度拜謁せる事ゑ許さゞると其情甚愁て涙ゑ滴るふ至る。先生其情状ゑ聞知て是ゑ憐ミ謁せる事ゑ許せふ業ゑ受る事ゑ許さゞ強て帰らしむ冬又来て固く請て止ぬふ於て終ふ業ゑ授く云ふ其餘傳記ハ諸書ふ出ゑ之ゑ姑置ふ伝ゑ友信州人市川信壽其墨跡の短冊ゑ花も珍故ふ摸出ぬ

綱代木

日遠遍

耳以左ゟ婦浪も水羅之

天佐由留宇治乃河風ゟ江原

ならさ先生の末孫中江久風の物語りに熊澤氏始て藤樹先生にまミえ入門の時了芥よめる

ミなる人の来る社に神ハなしこゝろの内に神そ住まし

と無拙以てとりましに藤樹先生

千早振神の社ハ月なまれや来るこゝろのうちにこそあれ

と有拙まって答しましとなり藤樹と了芥と師弟なれども後にその学風の異なることありしより顕然たり

仁斎先生櫻隠の號 附梨本翁

伊藤仁斎先生棠隠の別号あるハ世人の知る処なりされと櫻隠と号せることありて其故ハ古学和歌集に菴室の前に櫻を植て侍りしに年を経て花のさかりなりけれバ

世の中をいとひし身にもあはれなり桜の木のかくれ家の庭

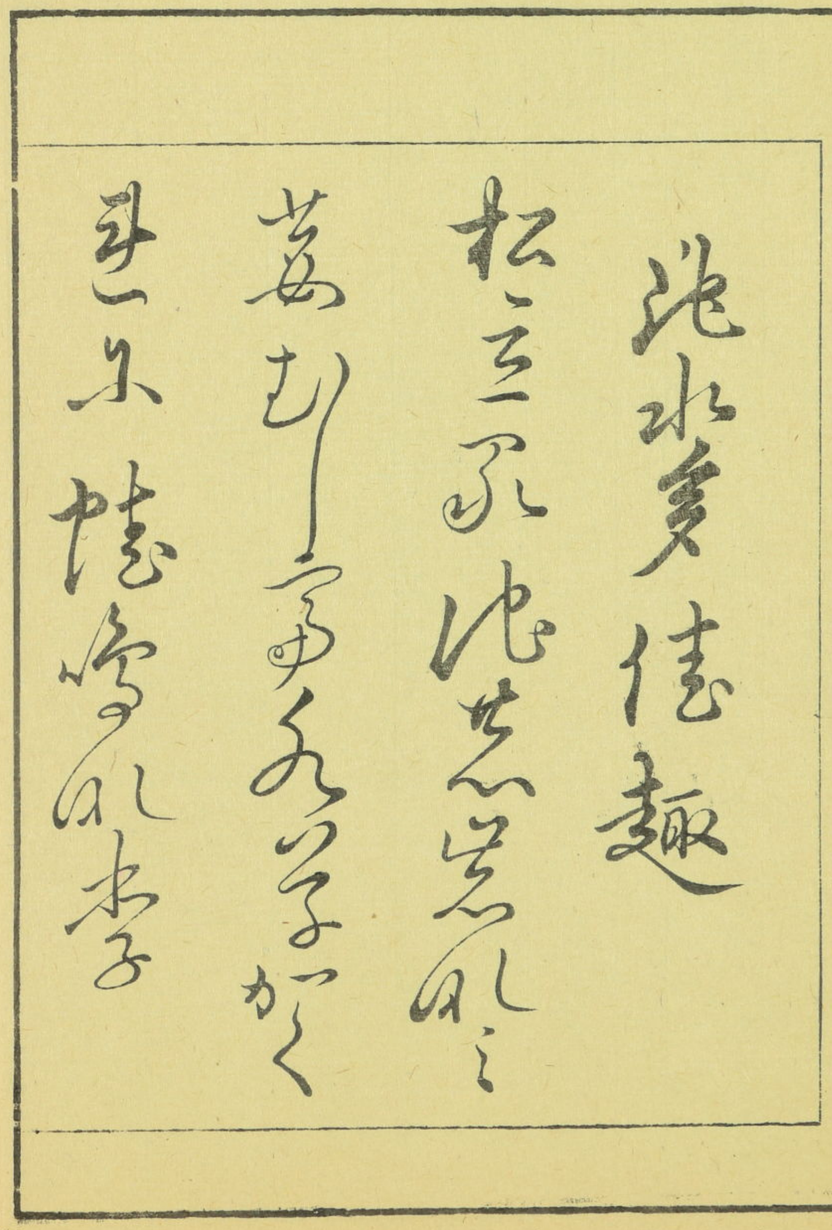
此比戸田茂睡（此人の傳巻四に詳なり）住菴を世の人のかくれ家といひけれバて

人しれぬ身にもあはれハ花のさかりとむしろなき隠家にて

又菴の前に山梨の木ありけれバ

のそきたる様世に住り果し老の身ハ隠れ住べき山梨のもと

是より茂睡に梨本乃号あり是住所ハ江戸にして同時の人なり歌にして其意あひて闇合せることをもしろし仁斎先生の真跡和歌を摸写してこゝに載せり



維楨

信州佐藤昌也藏

大石良雄三武畫讃 并子息童名

附 清人四十七士の義烈称誉する事

大石氏の画ハ巧なるハ世の知るところ更ハ云ハ及ビ近き頃宅山先生のその公ハ姫路ハ陪随せられ次ハ赤穂ハ遊バき佐古志浦の奥藤氏ハ邀へられ四五日其家ハ滞留せる良雄氏の遺墨ハ多く貯へ蔵ふ内ハ三武画讃と云

その内に二枚なりの屏風の如き帖なり右の図ハ源廷尉義経絵真の着色まそ画き鎧仕立と云甲冑ハて林几ハ倚り左手ハ弓絵とり右ハ軍扇絵持ち黒地ハ日輪絵朱ハて出きーなり其讃ハ曰

源義経者。頼朝秀弟也。秀恐季誤戰則勝之。攻則取之。本朝古采来誤無出其右者。可謂暗合孫吳壓倒韓白也。其事跡載在口碑。

左ハ武田入道信玄なり是を軍装なるき共甲冑ハ粗悪左手ハ料紙絵持右ハ筆絵搦る像なり讃ハ曰

武田信玄者。初名晴信。新羅三郎之後也。勇而用兵。破義清長時。而領其邑。與氏康信長相戰。而争其地。世多稱其謀畧。長尾輝虎其敵手也。

其手札ハ楷法瘦撲なるき共画法の功力ありるハ及ひがたくとそ此ハ義氏ハらの地の舊族ハて世〻大荘家販塩及ハ醸酒絵餘業ハ今の主人名ハ卓字君超好く竹絵画き猶と亭と称る浪華小竹翁ハ親く詩をまなび風流蘊藉の人なる故ハ浅野家退轉ハ前藩士より往復の書牘のうち彼義士の書簡絵集ハ一軸なる浪華竹山翁の跋文ハなり其文中ハ云浅野家士復讐の孫跡絵琉球人の清朝ハ到りーその事絵談ぜる絵ハ清人耳絵傾なそ是絵きと其義烈絵感ぜ一座泣やりざるハのなりと

大島華記と云書ハ見へうとなり 海外奇談と題する三巻あり赤穂義士の事絵忠臣庫より小説ハ記せ

富森助右衛門八書を佐玄龍ト学びて其風ヲ能ク三社宅宣或ハ神号ヲ
見ること巧ノ又阿州佐藤氏ハ青土佐屏風ヲ書キ一ヲ所ノ藏セリ

雲煙縮寫

越前大宮住吉社

富森華龍敬書

富森華龍敬書

大石良雄畫

小道縮寫

雲煙室藏

（城清人の改竄せしといへども恐らくハ安作なるべし）程春臺の産語の類なんを

良雄の長男城主税と稱せるハ誰を知る是ハ退轉の後元服

城加（）うを改名（）名なり初ハ松之丞と云赤穂没落乃

後父と共ニ京師山科の西山ニ僑居の日其所より新屋（赤穂乃城地の名）

なる前川某ニ贈る書の封皮奥義氏ニ遺り存せ大石主税

（）傍ニ松之丞事と注ス右ハ先生の摘紅小記（赤穂乃紀行）城抄出せ

（）

赤穂義士閑居替名　并大高志よう發句

赤穂義士各閑居の時城州伏見蛭子町の青楼ニ光陰送りる

其間戯文笹屋清右衛門なるもの所持（）る城些反祇園町ニて披

露（）るよ（）

大石良雄　うき　　大高源吾　志よう　　小野寺幸右衛門　ゆき

小野寺十内　ちけ　　中村勘助　なう　　冨森助右衛門　すけ

村松三太夫　さんた　　潮田又之丞　おの　　勝田新左衛門　せう

右何れも假名状ハて文ハ女子の如（）又良雄天井板ニ書捨し

城彼笹屋板を取りくづして屏風の如くニ仕立あり其詞ニ云

今日亦逢遊君。空過光陰。明日如何。可憐。恐君急

拂袖歸後。世人久不許逗留。不過二夜者也。

又大高源吾時の遊女の名城頭ニ書て屏風ニ書

夕霧や人まち窓の薄ゆきの利　　志よう

芳野いろニ白いニ袖ハ山さくら

高橋や名こそ乃夕きみ
風ふる雨の秋やゆうべき
初音とや一番たての郭公

近世名家書画談二編巻之三畢